

『詩をして語らしむ Ⅱ』

2021年06月30日

延岡三ツ瀬教会に在任中、詩人を目指していた本多寿氏という青年に出会い、交わりを持った。交流は途絶えていたが、詩の芥川賞と言われる「H氏賞」を受賞したことがきっかけになって、交流が復活し、詩集を贈ってくれるようになった。電話をするたびに、私が差し上げたマルチン・ブーバーの『我と汝』とニーグレンの『アガペーとエロース』を読み返し、『我と汝』が詩作を続ける力になった、感謝していると言われる。50年もの歳月、詩を学び、詩を作り続けている。朝日新聞宮崎版にエッセー「記憶の森から」を連載し、まとめて刊行した『記憶の森から 詩をして語らしむ Ⅱ』を贈ってくれた。彼の思想の深さ、感性の鋭さ、一途さに感激した。彼の才能が開花したのである。彼は、『詩をして語らしむ Ⅱ』の表紙に下記のように書いている。「ヨハネの福音書の冒頭部分は『初めに言葉があった』と始まり『この言葉に命があった。そしてこの命は人の光であった』とつづく。混迷を深める世界に、その光を求めて詩歌をめぐる。」彼はクリスチャンではないが、聖書をよく読んでいます。『信徒の友』の「新刊案内」に彼の詩集が紹介されていた。混迷の世界の中で光を求めると表紙に書かれた言葉が、詩を作り続ける深い動機である。

私は詩を読む力がなく、新聞に掲載される現代詩はほとんど理解できない。人は言葉によって関係を結び、意志を伝達していく。詩は、その言葉を紡いで思想と感性を表現する文学であろうが、その言葉は無限の広がりや飛躍をもっている。私は感性が鈍く、広がりや飛躍についていけない。本多氏は『詩をして語らしむ Ⅱ』で、多くの友人、知人の詩を紹介し、その詩を読み解いてくれている。それを読んで、なるほど、こういうことを歌っているのかと教えられた。彼は、詩だけでなく、短歌、俳句、川柳に至るまで、解説してくれ、学びが多く、興味津々であった。そして、詩人たちは、時代の闇を直視し、深い憂いの中にあるが、なんと優しいまなざしで詩作していることかと、知らされた。電話で、その感想を言うと、彼は、「愛」が深いところで芸術を支えているのではないかとされた。

「あとがき」に下記のように記している。「美しい詩がある。優しい詩がある。悲しみや苦しみを和らげてくれる詩がある。怒りを愛に、喜びを光に変えてくれる詩がある。ありふれた一日を宝物にしてくれる詩がある。…つまり生き難い世に、ささやかな希望を与えて導いてくれる詩がある。私は、それらの詩を一人でも多くの人に知って欲しくて連載を続けている。紹介した詩が読者それぞれに潤いをもたらすことを願っている。佳い詩との出会いが絶景になることを願っている。詩を虹として、また星として眺めてほしい。」こんな優しい言葉を、近頃聞いたことがない。

彼が書いた「しろい牛 くろい牛」を紹介したい。詩は行数の取り方が重要であろうが、できないので、行数を想像しながら読んで欲しい。

しろい牛がいて くろい牛がいる ちがいは(し)と(く)だけ しろい牛の乳も くろい牛の乳も どちらも まっしろ たべるエサも おなじなら、なきごえも おなじ
しろい牛と くろい牛が仲良くして しろい子牛と くろい子牛が生まれる どちらも しろい乳をのんで育つ ケンカをしないで草をたべる なんども なんども 噛んでたべる エサがないときは おとうさんの なきごえもたべる おかあさんのなきごえもたべる それでも たりないときは 小屋の壁をなめて眠り 夢の中にしげった青草をたべる 腹いっぱいにはならないが よく噛んで たべる 朝がくるまで たべつづける 夜が明けたら 空の太陽にあいさつする それから ほんとうの青草をおねだりする 願いは ただ もう それだけ